



「夏は夜が素晴らしい」。

そう書いたのは清少納言です。男子サッカーワールドカップ（W杯）ロシア大会では、テレビの前で朝まで過ごした人も多かったようですが、その熱い声援に、青いユニホームのサムライたちが見事に応えてくれました。正直、これほど力強く勝ち抜くとは予想しませんでした。

サッカーを観戦していると、試合の向こうに民族の性格、習慣、気候、風土が見えるようです。南米のブラジルはサンバ、アルゼンチンはタンゴ、欧米のイタリアはオペラ、ドイツはオーケストラと、祭りや音楽がそのプレースタイルに表れているかのようでした。オリンピックやW杯のように、国を背負ったスポーツイベントになると、文化や教育の問題まで見えてきます。

日本選手は「協調性にこだわりすぎるのが弱点」と評論家諸氏は指摘します。確かに

「個」よりも「和」を重んじる日本の国民性に当てはめると納得できます。

「日本の教育では、シュートを打って失敗すれば悪い評価になる。だから打てるのにその責任から逃れる」「日本のプレーは優等生すぎる」それは教育の問題であり「自分の考えを出さない国民性もある」と語った、歴代の外国人監督もいました。

W杯ロシア大会の日本代表は、決勝トーナメントで優勝候補ベルギーに惜敗しました。対コロンビア、セネガル戦も深く印象に残りますが、南さつま出身の大迫選手をはじめ、長谷部主将や吉田選手の、持てる力を尽くした戦いぶりに、多くの国民が感動しました。

無情なホイッスルの音、いつもクールな選手が涙を浮かべていました。芝に倒れ込んだ選手、去りゆく監督の後ろ姿等々。追いかけた夢が絶たれた瞬間でした。忘れ去られ

ていく勝利もあれば、長く語り伝えられる敗北もあります。敗北の悔しさや落胆の深さは、必ず次の飛躍につながります。

4年後のカタール大会に向けて、日本のサッカーは語り継ぐべきことを語り継ぎ、悔しさを深く心に刻み世界に挑戦してほしいと思います。

観客席のゴミ拾いや、選手のロッカーの清掃も世界の称賛を浴びました。「私たちの国には『来たときよりも美しく』という文化があります」と話した選手やサポーターを誇りに思います。

感動は、新たに挑戦する勇気を与えてくれます。多くの感動を残しながら、夏の夜は過ぎていきます。



指宿市長
豊留悦男